独創性という挑戦

令和６年７月３日
黒田インターナショナルコンサルティング
黒田　毅

独創性は高い理解性における未知の創造であるならば、今日世界を有する GAFAM などはこれである。

これらは時代を牽引する企業としての挑戦である。これらは企業の理解というソフト資産が飛躍を行い、独創性における市場の牽引を可能とするという真実なのである。

これらは、技術や理解が拡大し、独創性を可能とし、市場を牽引できることを意味する。これらは自らの製品や技術サービスにおける理解が時代性とともに拡大し、今日における新しい起業家とともに、未来を拓くことなのである。

これらは変化という今日における正しい理解の必要性なのである。

これら企業のオリジナリティは、独自企業哲学における結果であることは理解しなくてはいけない。松下幸之助氏や盛田昭夫氏が有したのはこれなのである。

時代を拓くことは企業の理想であり、独創性における自己製品サービスの構築がこれを与えるのである。

これら過去における企業の遺産である、製品とサービスへの理解が、拡大し未来を行うことは必ずできるのである。

これらソフト理解の拡大は、今日における趨勢である、知的集積産業や、知的生産への転換であり、これら新しい企業経営基準は新しいビジョンや理解を基盤とした新たな企業の可能性を実現できるのである。

これら過去からの飛躍は、競争原理におけるビジネスにおいて、未来への生き残りの必要であることは正しいはずである。

これら新たな経営判断は企業の未来という現実への参加を与える正しい選択なのである。